



宮坂静生薦 岳 9 月

歯を磨くマンハッタンのバルコニー  
長梅雨や家の鏡に知らぬ貌  
水水溶け行くやうに仕舞ひたき  
初蟬や浮世には未だ近付かず  
緑搖るる矢内原伊作忌日の来  
梅雨深しトラバーチンの石敢當  
僅かなる睫毛の陣地夏化粧  
島ひとつ入江に浮べ昼寝かな  
夕顔の花や湯女めく夜の匂ひ  
蟻行列花の凱旋門ぐりぐり  
虫送り虫の涙は露をなす  
世界中探してるんだ立葵  
星々と遠く旅するかたつむり  
梅雨満月この世あの世に大き穴  
宣言のうちなあぐちや慰靈の日

塗る前の壁の養生梅雨穂草虎が雨泣き腫らしたる如き靴  
梅雨穂草光に目方あるごとしなけなしの野心絞りぬ夏の草  
蛇いちご善根のごと十ばかり出稼ぎの留守守る田打桜かな  
三束雨過ぐるびんころ地蔵尊何処からともなく出だされし蚊遣豚  
青梅雨や名は道綱が母とのみ百合やつまらなさうな死者の貌  
雲梯をましらのごとく子等の夏けふ一日さらほうさら冷奴  
姥百合の飢ゑし記憶をもてひらく傘ひらく海月それぞれ個室もつ

桂木節子 小熊旭子 高橋子 久田子 上脇邦子 飯島千花子 今井愛子 さとうゆうこ  
北村宣枝 安田久太朗 田道子 中澤良子 岩間嘉一 上村敦子 真弓ばたん

堤　　五味　眞穂　　篠　遠良子  
田　　中　　岡草人　　田　中　純子  
松本　よし乃　　伊藤由希子  
岸　　後藤行雄  
功　　刀たかね  
丸　　山公子  
高　　松正子  
工　　藤貢明子  
小熊里利久根美和子

# 岳・見えたるひかり

(481)

宮坂 静生

—同人集・岳集・青雲集から

はじめに。『俳句必携—1000句を楽しむ』がよく読まれております。このくらいの着想や表現がすでに知られていると、「類想」の平均値を示したのが本書。ひとりひとりが類想基準とでもいうような目安を持って貰いたい。例えば「一杯の水を味はふ終戦日 三浦土火」この句あたりが類想基準すれすれかと私は判断している。

つまらなさうな死者の貌——これはすごい

白百合やつまらなさうな死者の貌 丸山 公子

びっくりした。なんと悲しいことか。もっと生きていたかっただろうに。死者にはみんな、いい顔してますねと言ふ。ところが、他界なんかあるものかと思つて死を迎えた者もあるう。きびしい見方には違ひないが、もっと生かしてやりたかったという思いからこの描写は、真の声を捉えてい

る。

晚夏光石となりたるものたちよ 堤 保徳

あえていえば世の捨石となつた者のことか。晩夏光はふし

蛇いちご善根のごと十ばかり 松本よし乃

蛇が付くためか、あまり見向きもされない野苺が十粒ほど。かえつて苺の本性を全うするようだ。食べられるが、美味ではない。無用のよさを讃える「莊子」風。さしたるものでない野苺への「善根」(よい行為)の比喩がおかしい。

出稼ぎの留守守る田打桜かな 伊藤由希子

雪国秋田は出稼ぎの国。しっかりと春まで地を守る田打桜(辛夷)を捉え、堅実な作。辛夷の咲く頃から田起しへ。

今月の秀句

塗る前の壁の養生梅雨穂草 五味 真穂

壁を塗る。一気に塗つてしまわないので壁の乾き加減を見ながら、上塗りを重ねる。それを「養生」という。長寿を保つ塩梅をいうこの鄙ことばが、左官さの作業ことばに用いられているのがおもしろい。梅雨季、四圍は穂草がみち、草々といのちを終える草ばかり。山川草木とともに生きる暮しをひたと身につけている作者。ひたすら努力を重ね、着実に力をつけてきた。ことし句集をまとめること。

ぎな季語だ。亡き者への弔意と作者の共感への感慨とが溶け合ひ、さりげない哀しみがこもる。

虎が雨泣き腫らしたる如き靴 篠遠 良子

さんざん履いた靴を「泣き腫らしたる」との比喩がユニーク。その靴が、「虎が雨」と合わせられることで、物語は曾我物語の場面へ転じる。父の敵討ちを果した後に死ぬ曾我十郎祐成の愛人が大磯の遊女、虎御前。旧五月二十八日の雨はお虎さんが流した涙雨とか。あとに残された靴は苦労を重ねた兄弟のものであつたか。お芝居好きの一旬。凝った仕立てに感心した。

梅雨穂草光に目方あるごとし 田中 純子

梅雨の穂草が放つ光のぼつたりした重さを巧みに捉えた。

なげなしの野心絞りぬ夏の草 中岡 草人

九十歳を越え、視力障害をむしろおのれへの叱咤として励んで来られた作者。生きぬく勁さが感じられる。

三束雨過ぐるピンころ地蔵尊 後藤 行雄

上州名物三束雨。麦を三束たばねる間もなく雷鳴がして急雨が襲う。その後、辻にはピンころ地蔵尊(ピンピンころりとぎりぎりまで元気でいたいという願掛けのお地蔵さん)。田舎暮らしのよき風景よ。消えていくものへの哀愁か。

何処からともなく出だされし蚊遣豚 岸元 忠義

世が進んでも夏は蚊遣豚の出番。よき町高山の作者。

青梅雨や名は道綱が母とのみ 功刀たかね

『蜻蛉日記』を繕いたものか。「なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし」と、道綱の母が平安中期(天延三年、九七五年)に記した心情は、時が移っても変らないのではないか。青梅雨を配し、茫茫たる空間が広がる。子の名の道綱の影にひつそり記した母の一字。見事な作。

雲梯をましらのごとく子等の夏 高松 正明

公園や校庭の遊具、雲梯(水平または弧状に張られた梯子)を猿のようにぶらさがって渡つていく潰刺たる子ら。向うに入道雲。真夏そのもの。作者は小学校の先生。

けふ ひとひ ささらほうさら 冷奴 工藤 貢

「ささらほうさら」は甲州・埼玉・信州等で用いられる。ひどいことが続く意。夕食に冷奴をつゝきながらダメな一と日を顧みる。共感同感。

歯を磨く—ところがマンハッタンとは

歯を磨くマンハッタンのバルコニー 真弓ばたん

日常の平凡事がニューヨーク市の中心地マンハッタンのあるホテルのバルコニーで。これだけで一大ニュースになる。

姥百合の飢ゑし記憶をもてひらく 久根美和子

姥百合は縄文以来の救荒作物。その根を水に曝して澱粉を採った。飢えの記憶をしっかりと姥百合自身に入力してあるようだ。その青白い花は妖怪めく。たくさんのがしきを貯め込んだので、そこいらの野の花のような純情さはない。姥百合はよく世の推移や人情を解している。花鳥諷詠の対象にはなりそうもない。その花もその実も人の世とともに苦労をかさねてきた。作者は本年度現代俳句協会年度作品賞受賞とか。

### 今月の秀句

無季かと思いや、バルコニーが夏の露台。淡い俳味あり。  
金ひらく海月それぞれ個室もつ 小熊里利  
鷹狩行の句「ビーチパラソルの私室に入れて貰ふ」を連想した。擬人化による俳味を愉しむ、知的でお洒落な作。

長梅雨が家靈を呼び出したものか。よく見たらわが顔であつたとの落ちを排除するふしげさがある。秀作。

氷水溶け行くやうに仕舞ひたき 岩間嘉一

なんとかなしい一句か。川中島の白桃作りの名人、微恙から復帰を。

初蟬や浮世には未だ近付かず 中澤良子

初蟬の世慣れないさまを言い、作者の気持を托したもの。

緑搖るる矢内原伊作忌日の来 田村道子

矢内原伊作は一九八九年八月十六日、七十一歳で逝去。サルトル、カミュなどフランス実存主義哲学の紹介者。彫刻家ジャコメッティのモデルになるなど、その親交は周知。些細な詩情を喚起しつづけた哲学者だけに、「緑搖るる」に注目した。

梅雨深しトラバーチンの石敢當 安田久太朗

沖縄の魔除けの石碑が石敢當。それが大理石造りとは。ぐつしょりと梅雨に抱かれ、沖縄の地貌が目に見えるようだ。

僅かなる睫毛の陣地夏化粧 北村宣枝

「睫毛の陣地」がおもしろい。そこが夏化粧の肝所。

島ひとつ入江に浮べ蜃寝かな さとうゆう

漱石の俳句余裕派調。志摩半島鳥羽の作者。大景上々。

夕顔の花を湯女に喻える自在な想像力に感心した。

蟻行列花の凱旋門くぐり 飯島千花梨

蟻の行列が名にし負うフランスの凱旋門をくぐるという。ときは夏。

虫送り虫の涙は露をなす 上脇邦子

田植過ぎから行われ、秋にもある虫送り。畦の朝露が虫の涙とはやさしいことよ。

### 青雲集—ベテランも新人も激刺

世界中探してゐるんだ立葵 久田恭子

葵の花が下から先へ咲きのぼるさまがなにかううる物を探している感じ。あるいは、作者がなにか世界中探しているものやひとがあるのか。それだとなぜ立葵なのか、他のものでもいい感じ。私は前者とみる。富山県の二十代の新進。発想が自由。若さというもののか。次の句も秀句候補作。

梅雨満月この世あの世に大き穴 小熊旭

「大き穴」が彼岸此岸にという宇宙的発想に注目した。

星々と遠く旅するかたつむり 高橋節子

なんと星の王子さまのよくなロマンを持ったかたつむりか。鈍重でまじめ一筋のかたつむりだけに、こんな夢を持たせてやりたい気持になるう。

宣言のうちなあぐちや慰靈の日 桂木節子

「うちなあぐち」は「沖縄口」で、沖縄のことば、方言の意。沖縄戦慰靈の日、六月二十三日の沖縄県知事の宣言に力あり。

## ○気になる表現

## 取り合せを考える

**原句** 登校児童殺傷さるる五月かな

「川崎児童事件」と前書。時事問題を取上げた句だが、採用しない。なぜか。悲惨な事件に「五月かな」と詠嘆の言い方は合わない。五月は一年中で最も気持がいい季節。その季節を背景にこの事件を「かな」留めの詠嘆で詠うのはどうか。こんな時に無残なという思いなら、「かな」留めではない。

## 表現で一番大事なところとは何か

**原句** ふるさとの墓誌に父母の名朴薰る

西川 五月

ふるさとの墓誌に父母の名朴の花

添削 良い句である。惜しむらくは下五音が細かい。散文調。これは「朴の花」と置いて、良い匂いは朴の花から読み手が想像する。俳句は全体の半分を作者が提示し、もう半分に読み手の想像が加わることで一句が成立する。作者が言いすぎてはいけない。どこまで作り手が言い、どこからを読み手に任せられるのか。一句一句についてこの加減を決めるのが、表現の一番大事なところなのである。

## ○このように添削し推敲する

**原句** 松虫草国鉄最高地点霧深し

田中 清子

鉄道の最高地点霧深し

添削

稻垣 敏子

「のたる」は違う意の鈴鹿地域の方言とか。おもしろい。

「松虫草」は余分。「霧深し」で秋の様子が十分に伝わる。

実景に松虫草があつたとしても、作品として必要かどうか考える。「国鉄」も古めかしい。ここは「鉄道」に。

**原句** ラムネ飲む喉骨羽化の兆しかな

三品 吏紀

添削 ラムネ飲む喉骨羽化の証しかな

三品 吏紀

人間の喉骨が鳥類からの進化の過程での「証し」であるという句と読んだ。「兆し」は何かが起ろうとする気配。進化については「兆し」ではなく「証し」であろう。あるいは、「羽化」は、羽が生えるような、羽化登仙の気持ちだと言いたいのかもしれないが、それなら「喉骨」はいらない。

**原句** 鱗舟を下りて急ぐは義母の家

土屋 隆

鱗舟を下りて急ぐは母の家

添削 「義母」でなく「母」でよいであろう。実母と義母を区別せず同じ母と考える方が、考えに括がりが出る。ただ、世の中にはここを問題にせずに義母を用いる選者もある。

**原句** 完熟のトマト取り入れ夕日かな

佐藤 悅雄

完熟のトマト取り入れ夕日中

添削 実際のトマトを取り入れ夕日中

ここは「かな」より「中」が良い。「かな」は感動を誘う

言い方であるが、ここは普通にあつさりした言い方の方が、句の内容にふさわしい。

**原句** 雨上がり一尺胡瓜のたりける

稻垣 敏子

添削 一尺の胡瓜ののたる雨上がり

「のたる」は違う意の鈴鹿地域の方言とか。おもしろい。